

## 巻頭言

「光陰矢の如し」とまではいかないにせよ、月日の経つのはあっという間だということを改めて感じています。日本で初めての本格的な赤外線衛星「あかり」の計画が始まってからはや20年以上がすぎ、打ち上げからもうすでに一回りが経ちました。一回前の戌年の2月に打ち上げられたとはなかなか実感が湧きません。データの解析作業はまだまだ続いていて、もうこんなに時間が過ぎてしまったのかと思うと、しばし呆然としてしまいます。

赤外線は、ダストに埋もれた星生成の現場や惑星系形成の観測に有効な手段であるばかりでなく、太陽系の小天体や外縁部の天体の研究にも貴重な情報をもたらす重要な波長です。「あかり」も、原始惑星系円盤の化学、暖かい残骸円盤の研究をはじめ、彗星や小惑星の組成の研究などに大きく貢献しました。昨年10月には国内外から100名以上の研究者が参加した第4回目の国際研究会を東京大学で開き、時の流れとともにさまざまな天文の分野における「あかり」をはじめとする赤外線衛星のデータの重要性を再認識しました。

現在「あかり」に続く大型冷却望遠鏡衛星SPICA計画にも参加させていただいています。SPICAは今年ESAのCosmic Vision M5の1段目の選抜を通過し、3年後の最終選抜に向かって検討を加速させています。SPICAの主要な科学目標は遠方銀河と星生成領域、原始惑星系円盤の詳細観測から宇宙の重元素・物質進化の歴史を探ることにあり、太陽系天体の研究も重要なテーマと位置付けています。宇宙科学研究所では広く天文分野の研究者の意見を取り入れるため、今年SPICA国内研究推進委員会を発足させました。SPICAの実現には惑星科学コミュニティをはじめとする広い分野からの支援が不可欠です。皆様からの支援をバネに、今度は本当に矢のように一回り先の戌年までの時間がすぎて、SPICAの打ち上げが迫ってくることを願っています。

尾中 敬(東京大学・大学院理学系研究科)